

甘藷の伝播ルートに関する調査報告

—甘藷は中国、琉球、薩摩・長崎対馬、韓国をつなぐ—

沖縄いものづるの会 顧問 **い は かつ お**
伊波 勝雄

1 中国から琉球への伝播

(1) 琉球（沖縄）と中国の明・清時代の交流は、進貢貿易によって行われていた。進貢貿易は、中国皇帝に貢物を捧げるという形で



行われ、1372～1874年までの502年間にわたり、毎年2～3回、100～300人前後のひとが中国に渡った。この進貢貿易による利益が琉球王国経営の重要な財源となり、琉球王国の繁栄を築く基となった。

中国に甘藷が持ち込まれたのは1594年で、中国の商人であった陳振竜よりフィリピンのルソン島から中国の福建省に伝えられた。沖縄県嘉手納町出身の野國總管は、1605年に進貢船の事務長として、中国福州に渡り甘藷の塊根（いも）を鉢植えにして琉球へ持ち帰った。それを郷里の野國村で栽培し、儀間眞常が考案した苗切り（きましんじょう）の方法で15年後の1620年には琉球全土に普及していった。

(2) 甘藷の振興に向けた沖縄での取り組み

①沖縄県嘉手納町における野國總管甘藷伝来記念事業は、350年祭（1955年）、400年祭（2005年）、410年祭（2015年）と3回行われてきた。また、毎年10月には「野國

總管まつり」を開催し、町おこしに貢献している。

②沖縄は温暖な気候に恵まれ一年中甘藷の花が咲くので、1914年には世界初となる甘藷の人工交配が沖縄県糖業試験場で実施された。この人工交配技術は、その後の日本における甘藷の新品種育成に多大な役割を果たすことになる。

③「沖縄いものづるの会」は、2006年3月に発足した。会員は、沖縄県内の甘藷生産者、加工業者、研究者および甘藷ファンなどで構成されている。本会では、沖縄における甘藷の発展を図ることを目的に、甘藷関係者の連携を図り研修会や産地見学などを実施し、機関誌も発行している。

④沖縄県では、2009年度から11（いい）月16（いむ：いもの意）日を「沖縄県いもの日」と定め、甘藷の普及・啓発と消費拡大を目的に活動を行っている。イベントは沖縄県内における地域持ち回りで講演会や研究発表会などを実施し、2016年は第8回目を数え、久米島で開催した。

2 琉球から薩摩・山川への伝播

琉球は、首里城を中心に琉球王国として発展していった。琉球の進貢貿易による富に着目した薩摩藩（鹿児島県）の島津氏は、1609年に琉球を攻略し、1874年に琉球藩と

なるまでの265年間にわたり薩摩藩の支配下に置いた。そのため、1609年以降の琉球の進貢貿易は、薩摩藩の主導で行われた。

琉球と薩摩との265年間に及ぶ交流は、山川（現・鹿児島県指宿市）の港を拠点に行われ、船が頻繁に往来した。その交易船の乗組員の一人であった前田利右衛門が1705年に琉球から甘藷を持ち帰り山川の地域に広めた。火山灰土壌で米作りが出来ない地域にあって、甘藷は山川の人びとの救世主となる。やがて、甘藷は「唐芋」の名称で薩摩藩全域に普及していった。

1735年、薩摩藩から甘藷の種いもを入手した青木昆陽は、江戸での甘藷栽培に成功した。その後、「さつまいも」の名で関東一円から東北地方にまで普及し、江戸時代の飢饉や太平洋戦争直後の厳しい食糧難から人びとの命を救った。

1934年に沖縄で育成された多収品種である「沖縄100号」は、全国各地で栽培され、最も多く食べられた。「沖縄100号」は、太平洋戦争前に日本から中国にも渡り、中国革命の勝利を記念した「勝利百号」の名称で広く栽培された。いわば、甘藷の親元である中国へ里帰りし、恩返しの役割を果たした品種と言えよう。

3 長崎県対馬への伝播

甘藷の対馬への伝播は、1713～1715年頃に原田三郎右衛門によって薩摩から持ち込まれたと言うのがこれまでの定説となっていた。その間の事情を調査するために、2005年8月に対馬を訪ねた。ところが、対馬の『峰町史』、『対馬人物史』の文献資料や郷土史家の話などを総合すると、薩摩からの伝播説は伝承の域を出ず、対馬藩の長

崎在住の役人が対馬に甘藷を伝えたという確証を得た。薩摩からの伝播説は、原田三郎右衛門が自ら語ったものではなく、死後に流布したようである。それゆえに、対馬に導入された甘藷は、入手経路や伝播者に対する畏敬の念以上に、甘藷そのものに島民が等しく恩恵に浴したことを感謝し、その功を親孝行になぞらえて「孝行いも」と呼ばれるようになったという。

いずれにせよ、対馬での甘藷の栽培・普及に尽力した原田三郎右衛門の功績は大きく、「孝行いも屋」と呼ばれ、島民の尊崇を受けている。また、原田三郎右衛門に薫陶を与え、イノシシ、シカ退治で島民を救った「対馬の聖人」と言われた農学者の陶山すやまとつあんとつあんの存在も忘れてはならない。

4 対馬から韓国への伝播

対馬から韓国への甘藷の伝播は、朝鮮通信使によってなされたと考えられる。朝鮮通信使とは、徳川幕府の将軍の代替わりや慶事に際し朝鮮王国から派遣された慶賀使のことである。朝鮮王国の慶賀使については、1607～1811年までの204年の間に計12回、1回につき400人、述べ4800人前後の使節団が対馬経由で江戸に渡っていることがわかっている。

おそらく、対馬から韓国へ甘藷を伝えたのは、この朝鮮通信使一行の中の誰かであり、時に1720年代前後ということになる。青木昆陽が江戸で甘藷の栽培に成功したのが、1735年であり、韓国への甘藷伝来は、それより15年も早く孝行いもの訛った「コグマ」の名称で伝えられた。今から遡ること296年前のことになる。その間の事情は、韓国の先生方からお教え願いたい。

5 甘藷による国際貢献

韓国釜山市生まれの在日韓国人の詩人キム・シジョン氏は、「生活に根差した知恵の集合が文化である。」と述べている。東アジア唐芋友好協会は、唐芋の生産・加工・販売などの生活文化に根差した知恵の相互交流であり、食文化の環流システムの構築を目指している

この民間の国際交流が、やがて友好から

友愛へと輪を広げ、東アジアの和睦と平和への架け橋となることを夢見ている。また、世界の食糧危機を救う作物は、甘藷以外にはないであろう。世界各地で幅広く甘藷づくりが盛んになることを切に願っている。

東アジア唐芋友好協会設立の仕掛け人である郷原茂樹氏に深く感謝の意を表し、発表を終えたい。